

東欧見聞録

中村 アキヤ

(一) モスクワにて

ソ連で勃発したペレストロイカの翌年、一九八六年秋のことである。

秋山は懇意にしているある商社のモスクワ駐在の三浦課長からの国際電話に
応対していた。

「久しぶりですね？ お問い合わせする件、その後いかがですか？」

「済みません、秋山部長。こちらの役所は全くラチがあきませんわ。御社の農薬の登録を急いで許可してもらうには、秋山部長にモスクワに乗り込んでいただき、農業省の局長に直接お願いするのがベストだという結論です」

「そんなこと急にいわれても、こちらはこちらでいろいろなスケジュールが一杯で…」

「そこを何とか、お願いしますよ。ここところが正念場で、先方に会っていただければきつと効果があると確信しています」

「ただ顔を出せばいいのですか？」

「昨年ペレストロイカ以来政治面ではまだ混沌としていますが、一般の人たちは急に文化に目覚めたとでもいうのでしょうか、西洋の文物への関心が急に高まってきたようなのです。ですから適当なお土産を用意すると有難いのですが」

「賄賂みたいな感じですね。私はその運び屋というわけですか？」

「そんな大げさなものはありません。仕事をスムーズに進める潤滑剤みたいなものがあればいいのです」

「潤滑剤？ 現金ではまずいでしょう？」

「お会いいただく農業省の局長はアメリカのジャズ、それもモダンジャズが好きで、局長のお子さんは現在はやりのプラモデルに夢中だと聞いています。」

部長のご判断で適当なお土産を見繕っていただけませんか？ それとは別に当地では入手困難なエロチックな写真でもご用意できると最高なんですけど、これは税関での没収覚悟でお持ちください。私はモスクワ空港でお待ちしています」

会社の費用で買い込んだジャズのレコード数枚と当時はやりのマジンガーZのキット、それにヌードの壁掛けカレンダーなどを買ひ揃え、秋山は勇躍モス

クワに乗りこんだのだが、当然のようにそれらは空港の税関での荷物検査で見つかってしまった。

「これはなんだ？」

係官の大声でロビー中の税関吏が早足で集まってきて、ニヤニヤしながらカレンダーの全ページを丹念にチェックし、全部見終わったのち何か言いながらこれくらいならと全品を返してくれた。

それらとは別に秋山は裏面にヌード写真が印刷されている、トランプ大のカレンダーカードを二十枚ほど用意していたが、これらは幸い見つからなかった。「何ともなかったですか？ 何も取り上げられなかった？ それは素晴らしい！ 秋山さんのお人柄ですよ」と出迎えに来た三浦がお世辞を言った。

翌朝、商社のモスクワ支店に行くのと三浦課長から、まことに申し訳ありませんが、先方の都合で打ち合わせが一日延期になりました。せっかく遠路はるばるいらしたので、モスクワの観光でもいかがでしょうか？ 当社の現地採用の秘書に案内させますので」とモスクワ大学の新聞部卒で英語が喋れるという女性を紹介された。

「初めまして、私はナターシャ・〇×△ドロワです。今日一日モスクワの名所をご案内します」という彼女は、髪の毛と同じ灰色の人懐っこい瞳をした女の子だった。背丈一六〇センチほどの細身の体形に、太編みの毛糸の帽子、ベージュのオーバーコート、黒いブーツ、赤皮の手袋といういでたちである。

二人は赤の広場に行きクレムリンやレーニン廟、葱坊主の塔のある聖ワシリイ教会の外観を見て回った。プーシキン美術館では、ルノアールの「黒い服の娘達」、ゴッホの「赤い葡萄畑」など著名な絵画を見ることができた。

「昼食は、外国人用ホテルの高級なレストランがありますが、私は入ることはできません。ほかには労働者の集まる食堂しかないのです、近く私のアパートで食べませんか」と言われて秋山は好奇心に駆られ同行した。

秋山はタクシーで約十五分、薄汚い四階建てアパートの二階の一角に案内された。そこはかび臭い板敷の四畳半ほどのDKと十畳くらいの居間兼寝室のみで、古いソファアベッドの上にソニーのラジオが吊るされ、床にはフラフープが無造作に置いてあった。女の子らしいアクセサリーや衣服類は戸棚にしまっているのか見当たらず、妙齢の大卒女子の部屋としては殺風景な雰囲気だった。

ポットでコーヒを沸かし、ハムの切れ端と黒パンをかじった。コーヒは粗挽きの豆をそのまま煮るので、上澄みを啜るか、殻を歯で漉しながら飲むしかなかった。

食事をしながらモスクワでの生活について教えてもらった。彼女の実家はモスクワから電車で一時間ほどの小さな町で、父親はその町長をしているが、健康に不安があり現在病院通いをしていること。病名を聞いたが二人の英語をもってしては父親の病名は判然としなかった。

「私の好きな食べ物はいーストロゴノフで他にペリメリやサリヤンカなどでサワークリーム主体の味付けのものです」

「日本ではボルシチが有名だけど、私にはペリメリとかサリヤンカとかは初めての名前ですよ。ところでナターシャ、君はアルコールは何を飲むの？ ウオツカ？ ロシアにはアルコール中毒の人が多くと聞いているが」

「私、アルコールは飲みません。ロシアの男性はウオツカを飲むけれど毎晩ではありません。アル中の人は居るけれどほんの一部の人です」

「では、君は会社が終わってから夜は何をしているの？」
「モスクワ大の新聞部の友人と会って話をしています」など他愛ない話題で一時間ほどの休憩時間はあつという間に過ぎてしまった。

午後からは共産党本部の高いビルや豪壮なボリシヨイ劇場の建物を見学し、三時頃商社に戻った。

翌朝ナターシャへのお礼にと、日本からのお土産を事務所に持参したが、彼女に会うことはできなかった。

「実はナターシャはバリバリの共産党員で、当然我々商社も行動を監視されているのです。昨日彼女の父親が亡くなったという電報が入り、昨夜のうちに彼女はモスクワを出ました」との三浦の話だった。

翌日農林省の局長室では、若い愛想のよい男が同席していた。局長は秋山の持参した日本土産に大満足で何回も感謝の辞を述べたが、秋山の訪問目的である農薬登録を早めるような言質は与えなかった。

三浦課長によると同席した若い男はお目付けの共産党員で、会談の内容を逐一チェックし、局長が客に好意ある発言をするかどうかを党幹部に報告すると同時に賄賂のお裾分けを狙っているのだという。

「大丈夫です。彼には日本の煙草を一ケース届けてあります」と三浦。

その夜はソ連では高級官僚のみが出入りを許される外国人専用ホテルで食事をした。フロアショー付きである。スタイルのよい、若く可愛い女性達がセクシーなダンスを展開している。

「彼女らはみんな公務員なのですよ。ウェイターもコックもそうですが」と三浦が説明してくれた。

華やかなショーが終わって若い踊り子達がぞろぞろフロアに出てきた。三浦が「ちよつとちよつかいをかけてみますね」と言って男好きのする一人の踊り子に何事か囁いた。その子は急に天井の一角を見て大声でなにか言っている。

「天井に隠しマイクがあつて、我々は全て盗聴されているのですが、あの踊り子は、『日本人に誘われたがハッキリ断った』とマイクに向かって喋ったので」と三浦が解説した。

食後は、コーヒーや食後酒を嗜む客のために、数名のバンドマンが居残って軽音楽を演奏している。

三浦がバンドリーダーに秋山の持参したヌードのカレンダー付のカードを渡し、秋山の方を指さして彼からのプレゼントだと言ったらしかなかった。

途端に演奏曲が「上を向いて歩こう」に変わった。三浦はニコニコして秋山にこう言った。

「バンドマンはみんな大喜びですよ。あのカレンダーのカードは換金できるんです。もつと沢山くれたら北方領土を返してもいいといっているんですがね」

(二) ベルリンにて

二年後の一九八八年十一月、デュッセルドルフからベルリンへの機中で秋山は東ドイツの上空を通過中だった。機内のTVで十数年前に人気者だったチェコの体操選手チャフラスカの年をとった姿を見て、急にナターシャを思い出した。「あの痩せぎすな女の子も、今頃はデブデブのオバアチャンになっているのだろうな」と。自分の体形のこととはさて置いて…。

前の晩デュッセルドルフに着いたのは午後の六時頃で駐在員の真田に迎えられて、彼の車でそのままシュロスホテルという名のホテルに連れていかれた。

シュロスとはドイツ語でお城という意味である。それは堀に囲まれた石造りの古色蒼然としたいかにも古城という感じのホテルだった。石橋を渡って入った薄暗いロビーには、二体の甲冑姿の騎士像が入り口を固めており、古いシエ

ードのかぶさったランプが鎮座しているカウンタ―は、秋山の胸の高さまであって、受け付けの女性と話すにはやや背伸びが必要だった。

「オーネバツ？ オーダー ミットバツ？」と聞かれ、数回聞き直して秋山は宿泊する部屋は浴室付きか？それとも無しでもよいか？という質問の意味がやっと分かった。大学時代の二年間のドイツ語の授業も実際の場面では役立つままで多少の時間が必要なようだ。

ベルリン空港では顔見知りのシェリング社のハインツ博士が迎えに来てくれた。当時ドイツの大手化学会社はバイエル社、ヘキスト社、BASF社が三大化学メーカーでシェリング社はやや小振りの医薬品専門の会社である。

他の会社と違ってこの会社の本社と研究所はベルリン市内中心部のやや北方のグリヒト通りにあった。

仕事の話が一段落して、ハインツ博士はベルリンに関していろいろなことを話してくれた。

「一九四五年の第二次大戦後、ベルリンは米・英、仏の占領地区である西ベルリンとソ連の占領する東ベルリンに分割されました。

一九四八年に西ベルリンはソ連により封鎖され、東ドイツの中の陸の孤島となり、封鎖が解かれるまでの十一ヶ月間は西側からの空輸によってのみ生活必需品が供給されたのです」

「私は子供のころ『大空輸』というアメリカ映画を見たことがあります。その時は戦争映画だと思っていたのですが、戦闘場面は全くなくて詰まらない映画を見たという記憶しかなかったのです。お陰様で今やっとベルリン封鎖という時代の背景がわかりました。皆さんは大変な苦勞をされたのですね？」

と秋山が感想を漏らした。

「そのころは食べ物がなくて、母親が大変苦勞した事実を覚えています」と博士は悲しそうな顔で答えた。

「その後一九六一年に、西側への市民の流出を抑える目的で東西を分ける壁が築かれ現在に至っています。壁の長さは約百五十キロメートルで約三百の監視塔があるといわれています」

「三百の監視塔ですか？」

「はい、三百か所です。そのために西ベルリンは人材や物資の調達に不便になり、市当局としては税金を緩和することで一般の会社がベルリンに居残るようにインセンティブを与えているのです」

と会社が不自由なベルリンに本拠地を置いている理由を教えてくださいました。

昼食後、研究所を取り巻く緑地の一隅に案内してくれた博士は塀の外側を見るように勧めてくれた。そこにある中五メートルほどのクリークが、東西ベルリンの境界線だという。対岸は三メートルぐらいの高さのコンクリートの塀が延々と連なり、クリークの手前の岸边には二か所に花束が飾ってあった。

「数年前、ここで二名の若い越境者が射殺されたのです。昨年までに千人の犠牲者が出ていると聞いています」と彼が深刻な顔つきで教えてくれたのが印象深かった。

ベルリン市内では、クーダム通りなどの繁華街は他の国の首都との違いはあまり感じなかったが、観光として見るべき建築物はほとんど東側にあり、わずかに爆撃で半壊したカイザー・ウイルヘルム記念教会を見物したのみであった。菩提樹の並木道であるウンター・デン・リンゲンはその東西境界線上に通行禁止の柵があり、柵越しに有名なブランデンブルグ門を望むことができた。

一九八八年当時は東西を分かっベルリンの壁が厳然として存在していたのである。

「秋山さん、東ベルリンに行かれるのなら…」とホテルのコンセルジュが流暢な英語で教えてくれた。

「チャーリーポイントで一日観光券を買おうと行くことができますが、くれぐれもご注意ください。カメラは持っていないかのように」

「チャーリーって人の名前ですか？」

「いいえ、米軍の部隊の呼称で第一中隊はアルファ一中隊、第二中隊はブラボ一中隊、第三はチャーリー中隊のようにアルファベット順に名前が付けてあって、チャーリーポイントは多分三番目の地点という意味だろうと思います」

チャーリーポイントからの、東ベルリン行きのバスの乗客は十数名だった。米国地区からバスで川を渡るとすぐに東の検問所だ。

橋の手前に看板があり、「貴方はアメリカセクターを離れます」と英、露、仏語で書いてある。

三十メートルほどの緩衝地帯の先に、ジグザグに配置されたバリケートがあり、その先で厳めしい態度の東側の兵士がパスポートと入国書類をチェックする。

検問所に入り、天井までの高さのベニア板で仕切られた狭い通路を辿り、一人ずつ二坪ほどの審査室に入れられる。正面の机にカーキ色の軍服姿の検査官

が座り、両側から屈強な兵士に挟まれるようにして面接を受ける。凄いい緊張感だ。

「東へのパスポートがない？ では一日だけ通用する観光券を発行する。二十四時間以上滞在すると逮捕される。街の中の写真を撮るのは禁止だ」と言われ、秋山は観光券代三十マルクを支払った。

検問所の東側の街路は、閑散として自動車は全く走っていない。十一月ともなると街路にはうず高く落ち葉が重なり、作業服を着た労働者がノロノロと手のひら大の落ち葉を台車に積み込んでいる。積み込む速度より落ち葉が溜る速度のほうがよほど早いのだ。

辻々に自動小銃を肩にした頑強な体格の兵士が配置されているが、近くでよく見ると彼らはまだ少年っぽさが残っている若者だ。見渡すと道路沿いに薄汚い看板の商店が並んでいるが、どの店もほとんど商品を置いていないし店員の姿もない。

秋山は地図に従って広いウンター・デン・リンゲンの通りを横切る。昨日遠めに見えたブランデンブルグ門を昨日と反対側から見ることができた。

西側との境界線が連なり、場所によっては塀の上部に鉄条網が張り巡され、三十メートルおきにある見張り台には、夫々数名の兵士が詰めている。

著名な博物館が隣接している博物館島への石橋を渡る。ベルガモン博物館の入場料は五ペニツヒ。東ベルリンへの一日観光券は三十マルクがいかに高いかわかる。

お目当ては、バビロンのイシュタル門だ。現在はイラク領になっているが、バグダッド南方のメソポタミア地方に栄えた、古代バビロニアの壮大な建築遺構。そこを調査したドイツ調査団によって、紀元前五世紀に建造された最も華麗な城壁の一部がベルリンに移設されたのだ。

釉薬をかけた彩色壁画、ラズベリー色のタイルに浮き出たライオン像の列や神話に語られた不思議な動物たちの像等々。これらの壮大な美術品を現地の壁から引きはがして持ち込んだドイツ国民の見識と気力に秋山は感心した。

もつともナポレオンはエジプトからオベリスクをパリに運んだし、イギリスの大英博物館にはロゼッタストーンが展示されている。日本にはなにがあるのだろうか？ 秋山はすぐには思いつかなかった。

暗い館内にはコツコツと衛兵の長靴の音が響くのみ。いつもどこからか監視されているような圧迫感。緊張感。追い立てられるようにして館内を回っただけで、秋山はえらく疲れ、エジプト館に周る気力が萎えてしまった。

帰途、兵隊がバスの床下に鏡のついた長い棒を差込み、不法出国者の有無を調べている。その間乗客は圧迫感から一言もしゃべらずに作業の終わるのを待っている。

西ベルリンに帰ってきただけで秋山は何とも言えない解放感を味わった。その夜、秋山は日本に電話した。

「どうしたの？ 急に電話などして。用がないなら電話代がもつたいないわよ。いくら会社が払うからといって……」女房の声を聴くだけで心が和んだ。

それから一年後の一九八九年、ベルリンの壁は崩壊した。

(三) ブカレストにて

一九九〇年、ブカレスト駐在員の野村秀雄が結婚することになった。彼の上司の福田支店長の説明によれば、野村はテレビで見た体操選手に憧れてルーミアアのブカレスト大学に留学、卒業と同時にそのまま現地採用の駐在員として入社し、仕事に慣れたこの時期に大学時代に同級だった美人の女の子と結婚するのだという。

「野村君のご両親は老齢の上、秋田県の郡部から外国に出かけるのは難儀だということ、本社の秋山部長が親代わりとなって結婚式に参列していただいたのです」との福田の要請で、秋山はモスクワの農業省に数年ぶりに立ち寄った帰路、時間をやり繰りし、革命後間もないブカレストにやってきたのだった。

「いや、大変な騒ぎでしたよ。当地のテレビやラジオの報道は突然体制側から反体制側に代わるもので報道内容がどこまで本当か信用できませんでした」

空港に出迎えにきた福田は、ホテルまでの車中で今年の革命騒ぎについて市内の状況を話してくれた。

「昨年の十二月に支店の近くの共産党本部前の広場でチャウシェスク書記長の演説があったのです。演説の最中に、十万名集まったという聴衆が動き出し抗議集会に発展したのです。その後危険を感じた書記長が、007の映画並みに本部ビルの屋上からヘリで脱出したとか、暴動鎮圧を指示されたミリヤ国防相が命令に反対したので殺害されたとか、それを聞いた国軍が反体制派に加担して、体制側の秘密警察と交戦中とか、いろいろなニュースが飛び交い、この広場を中心に三日ほど市街戦があったのです。ほら、この共産党本部ビルには銃

痕があるでしょう？ あそここの地下鉄の出口が反体制派の拠点でした。騒乱から半年たった今年五月に選挙があつて、イリエスク大統領が誕生し落ち着いたわけです」

現地通貨レイへの交換は市中の交換所で行ったが、出入り口にたむろしていたボロの衣服をまとった老人が、秋山一行について交換所に入ってきた。

「秋山部長、彼らはヒツタクリですよ。交換した通貨はしっかり守って下さい」と福田が注意した。

結婚式前夜、彼我の関係者約二十名を、一部修理中だったが当地最高のインターコンチネンタルホテルに招待して、顔合わせ食事会をした。全部こちらの奢りだ。

結婚相手のロレダナは髪も瞳も黒いすらつとした美人だった。秋山が驚いたのは彼女の友人がどの子もドキッとするくらいチャームिंगだったことである。

ルーマニアはローマ人の末裔とか、ラテン語系なので、フランス語、イタリア語などの言語はもちろん、英語も少しは理解できる。

メインディッシュは薄くて硬いステーキだった。先方の家族や親戚はこんな美味いステーキは初めてだとかぶりついていたが、あまりの硬さに秋山の入歯が外れてしまった。

食後、就寝前に秋山はバスルームに入り仰天した。しばらく使用していなかったと見え、床の排水口の金具の下から五ミリくらいの無数の黒い甲虫がゾロゾロ這い出してきたのだ。「エジプトのスカラベみたいだ」と秋山は思った。

結婚式は市内の古い教会で挙行された。三人の神父がオルガンに合わせ、鈴を鳴らして讃美歌を歌う。薄暗い、煤けた石壁の教会に美声が響いた。

披露宴会場はブカレスト大学出身の現役検事であるロレダナの兄が特別なコネをつかって在郷軍人会館を借り切ってくれた。ルーマニアの官吏の中樞はほとんどが同大学の同窓生で人口二千万弱の小国の運営を司っている由。

華やかな内装はなにもない中型のホールで、長い木製のテーブルが三台あり椅子は長い板に脚を付けただけの粗末なものだった。ホールのお雇いの三人のバンドが準備していた。楽器はギターとキーボードそしてバラライカだ。

食事はスープから始まったが、次のメニューに進むのに三、四十分かかるので、その間出席者は丸い輪になってスカートを翳しながら民族舞踊を踊るのである。

秋山は肥ったオバサンにマークされ何度も踊りに誘われた。顔はふけてみえても実年齢はかなり若いのだ。ダンスで組んだ時、右手をいくら伸ばしても彼女の背中の中中央まで届かない。曲にあわせてグルグルまわるときは彼女に振りまわされる形で目がまわった。

秋山が帰国する際、空港まで送りに来た支店のスタッフの増田が、コーヒード店でこういった。

「部長、ルーマニアでやれば絶対儲かる商売を見つけました」

「なんだ？ 教えてくれよ」

「ひとつはウオツシュレットです。冬が寒い当地では重宝がられると思いますが、問題があります。何分当地は水道も電気も供給が不安定だし、価格面からも可能性はあまりないようです。が……」

「が？」

「現実的なのはカレーハウスです。この国の人たちはカレーがみんな大好きで、安い外米をつかってコストを下げ、いろいろな風味のルーを揃えれば大ヒット間違いなしです」

「フーン、カレーねえ？ ルーマニアの人はなんでそんなに好きなんだい？」と不思議に思った秋山が尋ねたところ、彼はニヤツと笑って、指でテーブル上に字を書いた。

「ルー・マニア」と。

(四) 東京本社にて

秋山部長はここ数年の間にいくつかの東欧諸国を訪問する機会を得た。この地域ではものすごい速さで政治体制が変わり、歴史的な変革が起こっていることを実感した。秋山は旅行中に知り得た断片的な情報を思い返してみた。

西暦一九八五年（昭和六十年）にブレジネフに代わったゴルバチョフの主導したペレストロイカ（政治経済の硬直化打開の方策）と翌年のチェルノブイリの原発事故により共産党国家群の首領であったソヴィエト連邦の急速な衰退がはじまった。

十二月ゴルバチョフは一九八八年の「新ベオグラード宣言」により東欧諸国の共産党国家に対する統制を撤廃した。これを契機にして東欧の社会主義国で相次いで民主化、議会制への転換、市場経済の導入などが実施され、結果として数年のうちに社会主義諸国は消滅したのだ。

ハンガリーやポーランドは情勢の変化を巧みに読み取り積極的に国家改革に取り組んだ。すなわち一九八九年三月、ハンガリーに移住滞在していた千人に及ぶ大量の東独の難民がオーストリア経由で西独に脱出し、これを契機にベルリンの壁の存在意義が低下した。（鉄のカーテンの一角の崩壊）

またこの国では西独やオーストリアからの資本の導入をはかり、同年十月には総選挙の結果、共産党の一党支配は打ち破られた。

同年六月、ポーランドでは、ワレサ書記長のリードにより労働運動が民主化運動に転化し、暴力沙汰なしにソ連のくびきから抜け出し非共産党内閣が誕生した。

また、同年十一月チェコスロバキアでは時の共産党政府は民主化勢力との対話を余儀なくされ、なし崩しに一党独裁が崩れいわゆる「ビロード革命」が成功裏に進行した。

これがきっかけで翌十一月には鉄壁を誇ったベルリンの壁が崩壊し、一挙に自由化ムードが東欧諸国に広がった。（翌年東西ドイツが統一した）

十二月にはルーマニアで内戦が勃発しチャウシエスク共産党書記長夫妻が怒れる人民により惨殺され民主国家が誕生した。以後、東欧諸国では、国旗、国歌、国章などを一斉に変更し、共産主義対非共産主義の対立は解消したが、世界的に民主主義対全体主義の新たな対立を生むことになった。

東洋に目を転じると、同じ年六月に中国では胡耀邦の葬儀を契機として天安門事件が勃発している。

このように東欧圏では歴史的な変革が起こっている最中に、日本では昭和元祿の絶頂期の時代にあった。日本の化学会社の技術部長秋山は機会さえあれば、銀座や赤坂の馴染みの場所を飲み歩き、カラオケ三昧の優雅で能天気な活動を続けていたことになる。

そんな秋山は反省することもなかったし、まして「三十年後の日本は？」などと考えることもなかった。

（完） 9614語